

J・バトラーのジェンダー・パフォーマティヴィティとそのもうひとつの系譜 藤高和輝

1 はじめに

本稿は、ジュディス・バトラーの理論的代名詞ともいえるジェンダー・パフォーマティヴィティについて、とくに『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの転覆』（1990）とその前後のテキストに限定して考察する。¹ そこでまず、『ジェンダー・トラブル』の問題意識を確認するところから議論を始めたい。バトラーは1999年に寄せた『ジェンダー・トラブル』の序文のなかで次のように述べている。

私は、ジェンダー規範という暴力——例えば、解剖学的にみて異常な身体をしているために監禁され、家族や友人を奪われ、カンザスの大草原にある「施設」でその生涯を送った叔父、〔……〕そのセクシュアリティのために家を追われたゲイのいとこたち、十六のときの私の荒れに荒れたカミングアウトと仕事や恋人や家庭を失うというそれ以降に立ち現れた大人の世界の光景——について多少は分かるようになった。〔……〕〔私が本書『ジェンダー・トラブル』で、ジェンダーの〕非自然化（denaturalization）について記述したのは、〔……〕単に言語と戯れたいとか、「現実」の政治の場で道化を演じてみせたいと思ったからではない。それは生きたいという欲望、生を可能にしたいという欲望、そのような可能性を再考したいという欲望からなされたのである。私の叔父が家族や友人やその他の広範な人間関係といった集団のなかで生きるためには世界はどのようなものでなければならないのだろうか。私たちはいかにして、人間に対する理念的な形態学的な締めつけを、規範から締め出された者たちが生きながらにして死を宣告されることのないようなものに変えなければならないのか。（Butler, 2010c, pp. xx-xxi〔 〕内は引用者）

『ジェンダー・トラブル』の出版が1990年であるから、それが執筆された

のは80年代後半の頃である。当時のアメリカ合衆国ではHIV/エイズが流行し、またエイズが「ゲイの癌 (gay cancer)」とみされることでホモフォビアがいつそう煽られ、強化された時代だった。後にバトラーが振り返っているように、それはエイズで亡くなった者たちのほとんどが「公的に嘆かれることのない」時代であった (Butler, 2006, p. 35)。それはまたセクシュアル・マイノリティにとって、「エイズ危機」の中で醸成されたホモフォビクな社会において「生きながらにして死を宣告される」に等しい経験であった。『ジェンダーをほどく』(2004)でバトラー自身が振り返っているように、『ジェンダー・トラブル』は、「ジェンダー規範から外れ、その規範の混乱において生きている人々が、それでも自分たち自身を、生存可能な生を生きている者としてだけでなく、ある種の承認に値する者としても理解できるような世界を想像する試みだった」(Butler, 2004, p. 207)のである。したがって、バトラーが『ジェンダー・トラブル』で企てた「ジェンダーの非自然化」は決して単なる知的な遊戯でも言葉遊びでもない。二元論的なジェンダーとそのカップリングである異性愛を「自然」とみなす操作は、同性愛者やトランスジェンダーのあり方を「病理／異常」とみなすことと同義である。バトラーの「ジェンダーの非自然化」は、「女性の身体を脱構築で切り刻む」(バーバラ・ドゥーデン)というよりは、現実「に」切り刻まれた／「生きながらにして死を宣告された」ジェンダー／セクシュアル・マイノリティの生が「承認に値する」そのような世界を模索する試みだったといえる。

「ジェンダーの非自然化」を理論的に探求する上で援用されたのが、まさにジェンダー・パフォーマティヴィティの理論であった。『ジェンダー・トラブル』執筆当時のフェミニズム理論において、ジェンダーはセックスの「文化的解釈」と定義されるのが主流であり、そのため二元論的な性別観は生物学的な事実性として不問に付されていた。パフォーマティヴィティは、このようなセックスの二元論を温存し、ジェンダーをセックスの「表現 (expression)」とみなすモデルを乗り越えるために理論化されたものだった。本稿では、バトラー自身が80年代後半から『ジェンダー・トラブル』にかけていかにパフォーマティヴィティを理論的に形成していったかを考察の対象に据えることを通して、この概念の内実とそれがいかに「ジェンダーの非自然化」につながっている

るかを論じる。その際とくに焦点を当てたいのは、バトラーが『ジェンダー・トラブル』は「フランス理論」だけでなく「フェミニスト理論への長い従事から生まれた」(Butler, 2010c, p. x-xi) ものもあるというときの「フェミニスト理論」の系譜であり、具体的にはボーヴォワールやゲイル・ルービン、モニク・ウィティッグ、エスター・ニュートンらの議論である。本稿では、これに加えてさらにパフォーマンス・スタディーズの議論にも言及する。

2 ボーヴォワールの再記述

バトラーがパフォーマティヴィティに最初に言及したのは1988年の論文「パフォーマティヴ・アクトとジェンダーの構成——現象学とフェミニズム理論」(以下「アクト」と略記)においてである。パフォーマティヴィティといえば、もちろんその概念の祖であるJ・L・オースティンの名が浮かぶ。だが、この論文でも——そして実は『ジェンダー・トラブル』でも——オースティンへの言及はただの一度もないことにまず注意しよう。のちに、例えば『触発する言葉』(1997)でオースティンに積極的に言及するバトラーだが、当初はオースティンとの結びつきをそれほど強くは意識していなかったのかもしれない。この点に関してあらかじめ付言しておく、バトラーが言語行為論(とくに脱構築派の)に明示的に言及するようになるのは『問題なのは身体だ』(1993)以降であり、「パフォーマティヴィティはパフォーマンスに還元できない」と自覚的に語るようになるのも同書以降である(バトラーがパフォーマンス・モデルを批判するのはそれが自発的・主意主義的なものとみなされている限りにおいてである)。それに対して本稿では、バトラー自身が批判的に考えるようになったために先行研究ではあまり顧みられなかった「パフォーマンス」概念の意義にも焦点を当てていく。

では、バトラーはどのようにジェンダー・パフォーマティヴィティを着想するに至ったのだろう。それは先に言及した論文からも明らかな通り、そしてモヤ・ロイドも指摘しているように、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの『第二の性』の議論から出発している。ロイドは、バトラーのパフォーマティヴィティを「ボーヴォワールの再記述(re-scripting)」とまで評しているが(Lloyd, 2007, p. 41)、事実、バトラーが「行為(act)としてのジェンダー」を理論化

する上で最初に着目したのがボーヴォワールの思想であった。やや長くなるが、バトラーは前掲論文で次のように述べている。

フッサール、メルロ＝ポンティ、G・H・ミード等が提唱した「行為」の現象学理論は、社会的主体が言語や身振りやその他あらゆる象徴としての社会的記号を使って、どのように日常的に社会的現実を構成するかを説明しようとする。現象学はときに言語に先立って選択し構成する主体（構成という行為の唯一の源であるかのように装っている主体）が存在すると想定しているようにみえることがあるが、この構築論をもっと推し進めて、社会的主体を構築という行為の主体というよりも、むしろその対象と捉える使い方もある。／ボーヴォワールが「人は女に生れない、女になるのだ」と主張するのは、現象学の伝統からこの構成的行為に関する学説を自らに取り込みつつ解釈し直すことによってなのである。この意味では、ジェンダーは様々な行為が発生する原点となる安定したアイデンティティでもなければ、主体の場でもない。むしろそれは、時間の流れのなかでかりそめに構成されるアイデンティティ——種々の行為をあるかたちで反復することによって作り出されるアイデンティティなのである。[……] ジェンダーとは、様々な身振り、動き、パフォーマンスによって、ひとつのジェンダーを持つ自己という幻想を日常的に構成する方法だと理解しなければならない。(Butler, 1988, p. 519／は改行)

バトラーがこの論文でとくに援用しているのは、ボーヴォワールの現象学的身体論である。² ボーヴォワールは『第二の性』で「女」とは自然ではなく、絶えざる生成の過程にある「歴史的状況」であると主張したのであった。バトラーは別の論文「身体をジェンダー化する——ボーヴォワールの哲学的貢献」(1989)で、ボーヴォワールの「人は女に生まれえない、女になる」を取り上げ、そこで、「ひとが女になることを最終的に女「である」こととみなすのは誤りだろう。ボーヴォワールにとって、ひとは決して女「である」のではない。というのは、生成の行為は決して本当には完成しないからである」(Butler,

1992, p. 255) と主張し、また同様に「この生成にははじまりも終わりもない」(Butler, 1992, p. 257) と述べている。事実、ボーヴォワールが『第二の性』で明らかにしたことは、「女」の「意味」を生物学やマルクス主義、精神分析といったいずれか一つの方法で規定することが不可能であることだった。「女になる」というボーヴォワールの言葉が意味するのは、「女」の「意味」がつねに「生成」の過程にあり、そのときどきの歴史のなかで規定されるが、その意味を最終的に定義づけるような審級は存在しないということである。この意味で、ボーヴォワールにとっての「女」とは特定の（そして可変的な）「歴史的状況」である。

『ジェンダー・トラブル』ではボーヴォワールは「女になる」という生成や行為のまえに「ひと」を想定しているとして批判されるが、1980年代のバトラーはボーヴォワールの理論が主意主義的な「行為の主体」を前提にするものではないとみなしていた。事実、ボーヴォワールが『第二の性』で示したことは、「女になる」ことが「普遍」を標榜する「人＝男 (man)」に対する「他者になる」ということだったのであり、80年代のバトラーがいうように、「他者として、女たちには選択が欠けているというよりは、むしろ、彼女たちは自分たち自身のエイジェンシーの感覚に反対するものを選ぶよう強いられるのであり、そのため、まさに選択の意味をゆがめ、掘り崩すよう強いられるのだ」(Butler, 1992, p. 256)。

だが、このことは逆に言えば、ジェンダーに関するボーヴォワールの分析が「投企」や「選択」といった実存主義の概念に頼ることには一定の限界があることもやはり示唆している。「女になる」ことが個人の「選択」ではなく文化を通して「強制」されるものであるなら、「投企」や「選択」といった実存主義の概念は明らかに適切な分析タームであるとはいえない。実際、バトラーは『ジェンダー・トラブル』で「投企」や「選択」といった実存主義の概念を問いに付すことになるが、この批判はすでに論文「アクト」においても部分的に展開されている。バトラーはそこで、実存主義の概念に代えて「生存の戦略 (a strategy of survival)」(Butler, 1988, p. 522) という概念を用いており、「戦略」というフーコー的な用語でジェンダーのメカニズムを捉えることを提唱している。だが、1980年代のバトラーは、この批判を通じてボーヴォワールの

思想を否定するのではなく、むしろ、現象学的な行為概念を「行為の主体」を前提にするものからその主体そのものが社会的に構築されるような行為概念へと「拡張させる」方向へと舵を切る。まさにこの点に、ロイドがバトラーのパフォーマティヴィティを「ボーヴォワールの再記述」と呼ぶ所以がある。

「ボーヴォワールの再記述」を遂行する上で論文「アクト」において参照されるのが、人類学者のヴィクター・ターナーである。ターナーは人類学者だが、R・シェクナーとともにパフォーマンス・スタディーズの草分け的存在としても知られている。バトラーが注目するのは彼の「社会的パフォーマンス (social performance)」という概念である。「人類学者のヴィクター・ターナーは、儀礼的社会劇の研究で、社会的な行為はパフォーマンスの反復を必要とすると述べた。この反復は、社会のなかで確立された意味のひとまとまりを再演することでもあり、また同時にそれを追体験することでもある。それは日常的で儀礼化された形で社会的に確立された意味を正当化する」(Butler, 1988, p. 526)。バトラーはこの論を応用して、ジェンダーを「社会的パフォーマンス」と規定する。「ちょうど脚本が様々なやり方で上演されるように、また芝居には脚本と解釈の両方が必要なのと同じように、ジェンダーをもつ身体は、文化的に制限を加えられた身体空間のなかで自分の役割を演じ、すでに存在している規範の枠内で解釈を行う」(Butler, 1988, p. 526)。

ここで、80年代のバトラーにとって「行為／パフォーマンス」が持つ意味を明確化しておこう。バトラーがボーヴォワールを評価したのは、「行為」が現実や対象を構築する点を浮き彫りにしたからである。ジェンダーは人に生来備わっているような「自然」や「本質」がなんらかの「行為」を通して「表現」されたものではなく、むしろ「行為」を通してそのような「本質」が構築される(つまり、バトラーは現象学でいうところの「志向性 (intentionality)」を重要視していた)。だが他方で、バトラーがボーヴォワールの理論を問題視したのは、ジェンダーを記述する上で「投企」や「選択」といった概念がなじまないという点にあった。実際には、ジェンダーの行為は文化的・社会的に強制される(決定されるのではないにせよ)ものであり、人が自発的に「選択」するものであると言い難い。バトラーがジェンダーを「パフォーマンス」として捉えるときに強調するのは、「行為」は一方でそれが対象を「構築する」だけ

でなく、その行為自身が文化的、社会的慣習を反復するよう強制されるものでもある点である。あたかも俳優の行為が脚本によって規定されているように。この意味で、当時のバトラーにとって「行為／パフォーマンス」は主意主義的な概念ではない。さらに、それが「決定論」でもないことを付け加えることができる。ちょうど俳優のパフォーマンスが脚本によって規定されつつも俳優本人にはある程度の解釈の余地が残されているように、ジェンダーの行為／パフォーマンスは文化的規範に規定され、それを反復しつつも、そこにはつねに規範を裏切ったり、攪乱したり、あるいはとにかくその規範の実現に失敗してしまう可能性が存在する。のちにパフォーマンス概念は主意主義的に解釈され、バトラー自身批判的に再考することにもなるが、もともとパフォーマンス概念には自由意志／決定論の二元論を乗り越える意図があったというべきだろう。

3 パフォーマティヴィティの二重の歴史

バトラーのパフォーマティヴィティ概念が曖昧さを生むひとつの要因に、そもそもパフォーマティヴィティ概念自体が複雑な来歴を持っている点を挙げることができる。オースティンのパフォーマティヴィティがのちにデリダら脱構築派に批判的に拡張され、具体的には「デリダー・サール論争」を引き起こしたことはよく知られている。だが、アメリカ合衆国のアカデミズムにはパフォーマティヴィティをめぐるさらに厄介な歴史があることはあまり指摘されていない。先に言及したパフォーマンス・スタディーズがそれである。

パフォーマンス・スタディーズでもパフォーマティヴは用いられており、シェクナーによれば、それは「パフォーマンスのような (like a performance)」という幅広い意味で用いられる (Schechner, 2013, p.123)。ジェイムス・ロクスレイは、パフォーマティヴィティがパフォーマンス・スタディーズ (さらにカルチュラル／ポストコロニアル／クィア・スタディーズなど) において導入されることになるが、「それは必ずしもオースティンから借りられてきたのでも、オースティンへの応答を通して発展してきたねじれた伝統から借りてこられたのでもない。あるいは、もしそれが借用されているのであれば、それは移植された概念 (concept) というよりはむしろ〔単なる〕用語 (term) であろう」 (Loxley, 2007, p. 140) と指摘し、オースティン経由のパフォーマティ

ヴィティ（脱構築派の理論を含む）とパフォーマンス・スタディーズを中心に展開されたそれとの関係は「せいぜい潜在的なもの＝自覚症状のないもの（asymptotic）として記述される」（Loxley, 2007, p. 140）と述べている。

実際、パフォーマンス・スタディーズが誕生したのが1960年代、オースティンの『言語と行為』の出版が1962年で、おそらく両者は紙一重のところですれちがっている。このことはパフォーマンス・スタディーズ（あらゆる行為を「パフォーマンスとして（as Performance）」捉え返す研究）がもともとオースティンら言語行為論の影響から独立して生まれ、のちにその親近性が「発見」された、ということの意味する。パフォーマティヴィティには、ロクスレイの言葉を借りれば「二重の歴史」（Loxley, 2007, p. 140）、イヴ・コゾフスキー・セジウィックの言葉を借りれば「分割された歴史」（Sedgwick, 1993, p. 2）が存在するのである。そして、バトラーのパフォーマティヴィティはまさにこの歴史の接点にあるか、あるいはバトラーこそが二つの歴史を結びつけたと考えることができる。事実、J・H・ミラーはバトラーの『ジェンダー・トラブル』をこの二つの歴史（彼の言葉を借りれば「パフォーマンスとしてのパフォーマティヴィティ」と「スピーチ・アクトとしてのパフォーマティヴィティ」）の「ミッシングリング」と述べている（Miller, 2007, p. 222）。

ミラーと同様の見解をとるのがセジウィックである。セジウィックは以下のバトラーの言葉を引いて、そこにパフォーマティヴィティの「分割された歴史」の接点を見て取っている。そこで、セジウィックが引くバトラーの論文「アクト」からの言葉をみてみよう。

例えばジェンダーを、ある身体スタイル、いわばある「行為（act）」だと考えてみよう——それは志向的（intentional）でかつ「パフォーマティヴ」であるが、この場合「パフォーマティヴ」という語自体が「演劇的（dramatic）」と「非参照的（non-referential）」という二重の意味をもっている。（Butler, 1988, pp. 521-522）

ここでバトラーの「パフォーマティヴ」は「演劇的」であり「非参照的」であるという意味で用いられている。一方の「演劇的」の場合、それはパフォー

マンス・セオリーを思わせる規定である。バトラーの「パフォーマティヴ」を「行為遂行的」と訳すことにためらいを覚えるのは（実際、例えば表題の「パフォーマティヴ・アクト」を「行為遂行的行為」と訳すのは奇妙である）、それがときに“perform”（演じる）の意味合いを反響させたものでもあるからである。他方で、「非参照的」の場合には、パフォーマンスが参照するような「台本」（つまり本質や起源）は存在しないこと、その意味でジェンダーのパフォーマンスが「事実確認的」ではないことを意味するだろう（興味深いことに、邦訳では“non-referential”は「遂行的」と訳されている）。つまり、ジェンダーはなんらかの本質やアイデンティティを参照／指示しているのではなく、そのパフォーマンスの持続的な反復があたかもそのような実体があるかのように現実を構築しているのである（とりわけ、ここで重要なのは、ジェンダーがその「本質」としてセックスを「参照する」のではないという点である）。セジウィックはこの規定に、パフォーマティヴィティの「二重の歴史」、その「分割された歴史」の架橋を見出すわけである。

このように、バトラーのパフォーマティヴィティにある種の「二重の歴史」が反響しているのであれば、バトラー自身が『問題なのは身体だ』以降、明示的に言語行為論に積極的に活路を開いたためにこれまでの先行研究ではあまり考察されてこなかった「行為／パフォーマンス」としてのジェンダー・パフォーマティヴィティの系譜もまた議論されなければならないだろう。そこで引き続き、バトラーのパフォーマティヴィティを可能にした理論的系譜、言語行為論とは異なる議論に着目してみたい。

4 政治的カテゴリーとしてのセックス

——ルービン／ウィティッグの議論を通して

私たちは、80年代後半のバトラーがボーヴォワールの現象学から「行為としてのジェンダー」を抽出し、それをターナーの「社会的パフォーマンス」の概念と結びつけたことを確認した。それでは、この「パフォーマンスとしてのジェンダー」はいかにして「ジェンダーの非自然化」に結びついていくのか。本節では、『ジェンダー・トラブル』とその周辺におけるパフォーマティヴィティ理論に大きな影響を与えたゲイル・ルービンとモニク・ウィティッグの議

論を、次節ではエスター・ニュートンのドラッグ論を取り上げる。

『ジェンダー・トラブル』とその前後におけるジェンダー・パフォーマンスヴィティは、「セックス／ジェンダーの区別 (sex/gender distinction)」を問い直すことでジェンダーを「非自然化」するものだった。それはジェンダーをセックスの「表現」や「文化的解釈」とみなすのではなく、まさに行為／パフォーマンスとしてのジェンダーがその「本質」とみなされるセックスの幻影を作り出す、というものだった。実は、80年代後半のバトラーは、セックスという自然的身体も「徹底的に文化的な出来事」であるということをボーヴォワールの思想から読みとっている。

もし私たちが身体を文化的な状況と考えるなら、そのとき自然的身体の観念、実際には自然的「セックス」の観念はますます疑わしいものになるだろう。ジェンダーの限界、つまり性的に差異化された解剖学の生きた解釈に対する可能性の幅は、解剖学によって制限されているというよりも、慣習的に解剖学を解釈している文化的な諸制度の重みによって制限されているように思われる。(Butler, 2010a, p. 29)

このように、バトラーはボーヴォワールに、セックスを「自然」に位置づける「セックス／ジェンダーの区別」を批判的に問い直す視座を読み込んでいく。バトラーがこのようなボーヴォワールの議論の系譜として参照しているのがゲイル・ルービンやモニク・ウィティッグのテキストであり、バトラーはそれらを通してボーヴォワールの「反自然主義」を具体化していく。

「セックス／ジェンダーの区別」を批判的に問うバトラーの視点を考察する上で、ゲイル・ルービンの論文「女たちによる交通」(1975)は重要な影響をもつものだった。事実、バトラーは80年代の諸論文で繰り返しルービンに言及しているし、1999年に寄せられた『ジェンダー・トラブル』の序文でもルービンの論文が与えたインパクトに触れている (Butler, 2010c, p. xi)。ルービンは(「女たちによる交通」では「セックス／ジェンダーの区別」を基本的には踏襲しているものの)レヴィ＝ストロースの議論を批判的に読み込むことで、「近親婚の禁止」がジェンダーの非対称性を生み出すだけでなく「同性愛

差別」を生み出すことを指摘している。

近親婚の禁忌は同性愛の禁忌という不明瞭な前提を事前にもちだしている。ある種の異性愛的結合の禁止は、非一異性愛的な結合の禁忌を前提にしている。ジェンダーは一つの性への同一化だけではない。それはまた性的な欲望が他の性へと方向づけられるべきであるという帰結に論理的に逢着する。(ルービン, 2000, p. 133)

レヴィ＝ストロースがその『親族の基本構造』で明らかにしたことは、文化が発生するのは近親姦の禁止を通してであるということだった。近親姦の禁止が族内婚を禁じることで族外婚を可能にし、「女」が氏族間で「交換」されることで社会的な結束が形成される、というのが彼の議論だった。レヴィ＝ストロースはこのような近親姦の禁止を「自然」と「文化」の「あいだ」に位置づけ、文化の普遍的構造とみなした。ところが、この禁止はルービンが指摘するように「ある種の異性愛的結合の禁止」である。つまり、ここで禁止されるのは「異性愛」の近親姦であるというわけか前提にされているのである。そうだとすれば、つまり「異性愛」という特定の形式が成り立つためには、その前提として「同性愛一般」がまずもって禁止されていることになる。それゆえ、ルービンによれば、親族規範は「交換する者（男）」と「交換される者（女）」というジェンダー・ヒエラルキーを構成するだけではない。それはまた、「同性愛禁止」の構造を生産するものでもあるのだ。ルービンはレヴィ＝ストロースの批判的読解を通して、親族規範に「同性愛差別」を再生産する構造を明らかにしたのである。

この点をもっともラディカルに問い直したのがモニク・ウィティッグだったといえる。ウィティッグは、セックスというカテゴリーそのものが異性愛規範によって成立していることを明らかにした。「セックスは社会を異性愛的なものとして作り出す政治的カテゴリーである」(Wittig, 1992, p. 5)。彼女によれば、セックスは「女性」を「男性」との関係で規定する。それは「女性に「種」の再生産、すなわち異性愛の再生産の義務を課す異性愛社会の生産物である」り、女性が「異性愛化される」ことを「自然」とみなすカテゴリーである

(Wittig, 1992, p. 6)。セックスを「あらゆる社会の前に」(Wittig, 1992, p. 5) あるような自然的カテゴリーではなく、それ自体を政治的なカテゴリーとみなしたウィティッグの理論は、D・G・クラウドも指摘しているようにバトラーのパフォーマティヴィティに酷似している (Crowder, 2007, p. 491)。

バトラーは論文「セックスとジェンダーの変異——ボーヴォワール、ウィティッグ、フーコー」(1987) で、このようなウィティッグの議論をボーヴォワールの系譜の観点から読解している。「もし自然的身体——そして自然的「セックス」——がフィクションであるなら、ボーヴォワールの理論は暗黙のうちにセックスが最初からジェンダーだったのではないかを問うているように思われる。自然的「セックス」へのこの挑戦をはっきりと定式化したのがモニク・ウィティッグである」(Butler, 2010a, p. 29)。このように、バトラーは(両者の思想的な立場の違いを認めながらも)ボーヴォワールの系譜からウィティッグの理論を読解し、セックスの二元論にジェンダーを還元させない議論として解釈している。実際、バトラーは先の論文で次のように述べている。「ウィティッグは概してセックスの超越を求めているが、しかし彼女の理論は等しく反対の結論、すなわちジェンダーの増殖を通してその二元論的制約を溶解することへと私たちを導くものでもあるだろう」(Butler, 2010a, p. 32)。後者の立場が『ジェンダー・トラブル』の立場と同じものであることは明白である。³

周知のように、バトラーは『ジェンダー・トラブル』でウィティッグの前者の傾向、すなわち、レズビアン存在を「セックスの超越」とみなす傾向(つまり、レズビアンを「男」でも「女」でもない「第三の性」とみなす傾向)を批判した。レズビアンを「法の外部」に位置づけるウィティッグの理論的傾向は、レズビアンを権力から離れた「解放的主体」と位置づけることに陥る可能性がある。バトラーは『ジェンダー・トラブル』でそのような理論化は結果として、ブッチやフェムをはじめとした「セックスのカテゴリーを奪取し再配備することによって同性愛特有の性的アイデンティティを増殖させるような言説——ゲイ/レズビアン文化のなかの言説——に応じない」(GT, p. 166) ことになるのではないかと論じている。これはバトラーが『ジェンダー・トラブル』で一貫して展開している議論だが、論文「セックスとジェンダーの変異」

で興味深いのは、同様の批判をバトラーがボーヴォワールに即して行っている点である。「ボーヴォワールが述べているように、そしてウィティッグが知るべきであるのは、文化の関係の外部には「人間の現実」へのどんな意義のある参照も存在しないということである。そして、二元論的制約を乗り越えようとするための政治的プログラムは、超越の神話よりも、むしろ文化的な刷新に関わるものであるべきだということである」(Butler, 2010a, p. 32; 強調引用者)。言い換えれば、バトラーは「ボーヴォワール主義者」としてのウィティッグを肯定しているといえるだろう。

このように、バトラーはボーヴォワールの議論に潜在的に認められる「ジェンダーの非自然化」の理論を、ルービンやウィティッグを参照することを通して、より具体的な厚みを持たせることになる。セックスは所与でも自然でも事実性でもない。それは異性愛規範によって可能になり、そして社会を異性愛化する政治的カテゴリーである。そうだとすれば、「自然」としてのセックスの自明性は失われ、同様に「セックス／ジェンダーの区別」はもはやその意味を失うということになる。セックスの二元論的な表象が自然で自明のように思われるのは、セックスが自然的な本質や事実性だからではなく、社会的規範のもとで強制的に反復されるジェンダー・パフォーマンスの結果なのである。⁴

5 模倣としてのジェンダー

——ニュートンのドラッグ論を通して

バトラーは、ボーヴォワールの思想がジェンダーをセックスから切り離すジェンダーの反自然主義的な記述の可能性を開いたと指摘し、その可能性をルービンやウィティッグを参照することで深化させたといえる。このような「ジェンダーの非自然化」を推し進める上で、バトラーが着目したのが「ジェンダー横断的な同一化」の実践だった。実際、バトラーは論文「身体をジェンダー化する」で、ボーヴォワールの分析をよりラディカルに開く上で「ジェンダー横断的な同一化」の例を挙げている (Butler, 1992, pp. 259-260)。そして、『ジェンダー・トラブル』におけるジェンダー横断的な同一化の特権的な例がドラッグであったことは言を俟たない。

バトラーが『ジェンダー・トラブル』でパフォーマティヴィティの例として

引いたのがドラッグだったが、その結果としてバトラーの理論がジェンダーを服装のように「自由意志」によって「選択」できるものとして主意主義的に解釈されたことは皮肉としかいいようがない。のちにバトラーは、主意主義的な解釈との混同を斥けるために、パフォーマンスとパフォーマティヴィティを理論的に区別しなければならないことを強調することになるが、ドラッグがバトラーに与えた洞察を無視することは決してできないだろう。ドラッグはバトラーにとって、あらゆるジェンダーが「オリジナルのない一種の模倣である」こと、首尾一貫していると想定されるセックス、ジェンダー、セクシュアリティがそれぞれ「別物」として演じられ、行為されうる可能性を示すことで「ジェンダーの偶然性」を明らかにするものだった。だから、ドラッグそれ自身は「抵抗」でも「攪乱」でもない。それはバトラーにとって、あらゆるジェンダーに含まれる構造を説明するアレゴリーである。

ドラッグは、ジェンダーが実体や属性、アイデンティティではなく「行為／パフォーマンス」であり、そして「行為／パフォーマンス」である以上つねに潜在的に「失敗」の可能性に脅かされたものであるという洞察をバトラーに与えたものだった。この点で重要なテキストがエスター・ニュートンの『マザー・キャンプ——アメリカにおける女装者 (*Mother Camp: Female Impersonators in America*)』(1972)である。バトラーは論文「模倣とジェンダーへの抵抗」(1991)のなかで次のように述べている。

ここで告白に似たものを紹介するが、それはただ告白というものが不可能だということを理論化するためである。若い頃、私は私の「存在」がコピーであり模倣であり、派生的な例であり、現実の影であるといわれることに長いあいだ苦しんだ。強制的異性愛は、オリジナル、真理、正統であると自称する。本物を決定する規範が意味するのは、レズビアン「である」ことはつねに一種のもののまねで、市民権を与えられている異性愛の幻想にすぎない充足を自分も経験しようとするが、それはつねに失敗するだけの無駄な努力であるということだった。しかし、ドラッグがなんらかの真理や先立つジェンダーの模倣でもコピーでもないとしたエスター・ニュートンの『マザー・キャンプ』をはじめて読んだとき

のことを、私はいまでも鮮明に思い出す。ニュートンによれば、ドラッグはあらゆるジェンダーが本物だとみなされるために必要とするもののまねの構造を実演してみせるのである。(Butler, 2010b, p. 127)

ニュートンの『マザー・キャンプ』は驚くべきことに1972年に書かれたものである（それはもともと1968年に博士論文として執筆されたものを修正して出版されたものである）。それはウィリアム・リープがいうように、「レズビアン／ゲイ／バイセクシュアル／トランスジェンダーの研究者がクローゼットから出ることが安全になるずっと以前のこと、レズビアン／ゲイ／バイセクシュアル／トランスジェンダー・スタディーズが学者のキャリアがとりうるひとつの道程になるずっと以前のこと」(Leap, 2000, pp. xviv-xx)であり、またジュディス・ハルバースタムがいうように、「ニュートンが『クィア』であるのはその言葉が新しい世代に再生され再利用されるようになる以前のことであり、そして彼女がブッチネスに同一化したのはレズビアン・フェミニズムがブッチーフェムを逸脱した、流行遅れの、奇怪なカテゴリーとみなしていた時期のことである」(Halberstam, 2000, p. xii)。

さて、ニュートンは『マザー・キャンプ』のなかでドラッグを論じながら、ジェンダーを一種の「行為／パフォーマンス」として記述している。「ドラッグ・システムの効果は、性別役割を一般にそれらを規定すると考えられているもの、つまり解剖学的な性差（sex）から解き放つようにねじ曲げることである。ゲイの人々が知っているのは、性別に分類された振る舞いは達成されうるものである〔……〕ということである」(Newton, 1979, p. 103)。この「達成されうる（can be achieved）」という言い方は、性別に分類される行為が解剖学的な事実によって決定されているということではなく、それが上手くなされれば別の性別のひとにでも「達成されうる」可能性を示唆している。そして、このことはその反対のこと、すなわち、セックスに「自然に適合している」と思われている振る舞いも、解剖学的な事実に由来するのではなく、うまく「なされている」にすぎないということを意味するだろう。「もしも性別役割の振る舞いが『誤った』性差をもつものによって達成されうるなら、それは論理的に、その振る舞いが『正しい』性差をもつものによっても、遺伝的に相続され

るのではなく、達成されうるものであるということを示している」(Newton, 1979, p. 103)。

このように、ニュートンはジェンダーの「行為／パフォーマンス」をセックスから切り離す。ジェンダーが「行為／パフォーマンス」であるということは、それが「正しい」セックスをもつ者であれ「誤った」セックスをもつ者であれ、ジェンダーを「達成」するためには模倣的なパフォーマンスを反復しなければならないことを意味する。まさにドラッグが実演してみせるのは、あらゆるジェンダー、自然に適合しているように見えるジェンダーでさえ、それが一連の行為であり、ドラッグと同様の「ものまね (impersonation)」の構造を有していることなのである。バトラーは『ジェンダー・トラブル』でニュートンに言及した箇所ですべてのように述べている。「ジェンダーを模倣することによって、ドラッグはジェンダーの偶然性だけでなく、ジェンダーそれ自体が模倣の構造をもつものであることを明らかにする」(Butler, 2010c, p. 187)。

ここまでの議論を整理しよう。『ジェンダー・トラブル』とその周辺におけるバトラーのパフォーマティヴィティ理論はまず「ボーヴォワールの再記述」として押さえることができた。ボーヴォワールはジェンダーを「生成」や「歴史的状況」として捉えた。それはセックスのような自然的本質を前提にしない「行為としてのジェンダー」の理論を切り開くものだった。バトラーはこのようなボーヴォワールの思想を、ターナーの「社会的パフォーマンス」、ジェンダーの非対称性が異性愛規範と不即不離の関係にあることを洞察したルービンの研究、セックスが異性愛を自然なものとして強制する政治的カテゴリーであるとしたウィティッグの理論、ドラッグの人類学的研究を通してジェンダー・パフォーマンスをセックスから切り離すニュートンの研究と結びつけることで、よりラディカルに「ジェンダーの非自然化」を推し進めたのである。⁵ 「ジェンダーがパフォーマティヴである」ということは、一方でジェンダーが「模倣」の構造をもつという意味で「演劇的 (theatrical)」であり、他方でジェンダーの「模倣」がなんらかの「起源」や「本質」を模倣するのではなく、そのパフォーマンス自体が模倣の対象を生み出すという意味で「非参照的＝遂行的 (non-referential)」であるということである。バトラーのパフォーマティヴィティ理論は、このようにジェンダーを非自然化することを通

してジェンダー規範の暴力によって「偽物」や「コピー」として蔑まれるマイノリティが生きる隙間を拡げる試みなのである。

6 おわりに

本稿では、バトラーのジェンダー・パフォーマティヴィティを学説史的に検討してきた。オースティン以降の（脱構築の解釈を含めた）言語行為論がバトラーの理論形成に与えた影響を認めつつ、しかし、先行研究ではあまり着目されてこなかった系譜にとくに焦点を当てた。結果的に、ジェンダー・パフォーマティヴィティを、まさにバトラーの「オリジナルな」概念としてというよりは、様々な理論や研究の歴史的な接点において形成されたものとして描くことになったといえるかもしれない。そこで結論に代えて最後に触れたいのが、80年代後半から90年代前半にかけてバトラーがジェンダー・パフォーマティヴィティを理論化したまさにその時代の政治状況である。

折しも、バトラーがジェンダー・パフォーマティヴィティを理論化した時期は、エイズ・アクティヴィズムのアクト・アップ、そこから派生したクィア・ネーションが「ダイ・イン」や「キス・イン」のようなパフォーマンスを政治的に活用した時期でもあった。『ジェンダー・トラブル』がクィア・ムーヴメントのうねりのなかで理論化されていたのであれば、バトラーのパフォーマティヴィティ理論には当時の社会運動との同時代性を見出すことができるだろう。⁶ 『ジェンダー・トラブル』出版から20年以上経た今、改めてその歴史的背景を注視する意義は決して小さくないはずである。本稿ではそのような歴史的考察を「学説史」に限定して行っただが、フェミニストやクィアの理論家、研究者たちとのある種の「共闘」によってバトラーのパフォーマティヴィティ理論が形成されたという事実非常に励まされたことを最後に記して筆を擱くことにしたい。

Footnotes

- ¹ 本稿では『問題なのは身体だ』（1993）以降のテキストを主要な考察の対象には据えない。さらにいえば、オースティン以降のパフォーマティヴィティ理論には言及しない。言語行為理論とバトラーの理論との関係に関しては別の機会に論じることしたい。
- ² 80年代のバトラーと現象学的身体論の関係に関しては、拙論（2015）を参照。
- ³ ウィティッグを後者の視点から読むバトラーの論考として Judith Butler, 2007, “Wittig’s Material Practice: Universalizing a Minority Point of View,” in *GLQ*, vol. 13, no. 4がある。この論考にはバトラーがウィティッグを知った経緯も説明されていて興味深い。
- ⁴ ここでセックスとセクシュアリティの因果論を転倒させたフーコーの『性の歴史Ⅰ——知への意志』に言及すべきだが、この点に関しては以下で考察したのでくり返さない。拙論（2015）を参照。
- ⁵ 本稿ではバトラーのパフォーマティヴィティに連なる理論的系譜を強調するあまり、言及した各論者それぞれの議論をやや平板化したきらいがある。各論者間の差異については今後の課題としたい。
- ⁶ もちろん、現代を生きる私たちが過去のクィア・ポリティクスの政治的パフォーマンスを手放しに称揚するわけにはいかない。クィアのパフォーマンスがその政治性を脱色された上でネオリベラリズムに取り込まれている状況については、清水（2015）を参照。

References

- 藤高和輝. (2015). 「現象学からフーコーへ——1980年代におけるジュディス・バトラーの身体論の変遷」. In 『年報人間科学』, vol. 36, pp. 103-117.
- ルービン、ゲイル. (2000). 「女たちによる交通——性の「政治経済学」についてのノート」 (長原豊, trans.). In 『現代思想』, vol. 28 (2), pp. 118-159.
- 清水晶子. (2006). 「キリンのサバイバルのために——ジュディス・バトラーとアイデンティティ ポリティクス再考」. In 『現代思想』, vol. 34 (12), pp. 171-187.
- . (2015). 「ようこそ、ゲイ・フレンドリーな街へ」. In 『現代思想』, vol. 43 (16), pp. 144-155.
- Butler, J. (1988). Performative Acts and Gender Constitution: An Essay in Phenomenology and Feminist Theory. In *Theatre Journal*, vol. 40, pp. 519-531. (= (1995). 「パフォーマティヴ・アクトとジェンダーの構成——現象学とフェミニズム理論」 (吉川純子, trans.). In 『シアターアーツ』, vol. 3, pp. 58-73.)
- . (1992). Gendering the Body: Beauvoir's Philosophical Contribution. In *Women, Knowledge, and Reality: Explorations in Feminist Philosophy*, edited by Garry, A. and Pearsall, M. New York & London: Routledge, pp. 253-262.
- . (2004). *Undoing Gender*, New York & London: Routledge Press.
- . (2006). *Precarious Life: The Powers of Mourning and Violence*, New York & London: Verso.
- . (2010a). Variations on Sex and Gender: Beauvoir, Wittig, Foucault. In *The Judith Butler reader*, edited by Salih, S., & Butler, J., Singapore: Blackwell Press, pp. 21-38.
- . (2010b). Imitation and Gender Insubordination. In *The Judith Butler reader*, edited by Salih, S., & Butler, J., Singapore: Blackwell Press, pp. 119-137.
- . (2010c). *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York & London: Routledge Press.
- Crowder, D. G. (2007). From the Straight Mind to Queer Theory. In *GLQ*, vol. 13, no. 4, pp. 489-503.
- Halberstam, J. (2000). Foreword: The Butch Anthropologist Out in the Field. In Newton, E. *Margaret Mead Made Me Gay: Personal Essays Public Ideas*, Durham & London: Duke University Press, pp. ix-xviii.
- Leap, W. L. (2000). Foreword: On Being Different: An Appreciation. In Newton, E.

Margaret Mead Made Me Gay: Personal Essays Public Ideas, Durham & London: Duke University Press, pp. xix-xxii.

Lloyd, M. (2008). *Judith Butler: From Norms to Politics*, India: Polity Press.

Loxley, J. (2007). *Performativity*, New York & London: Routledge.

Miller, J. H. (2007). Performativity as Performance/ Performativity as Speech Act: Derrida's Special Theory of Performativity. In *The South Atlantic Quarterly*, vol. 106, no. 2, pp. 219-235.

Newton, E. (1979). *Mother Camp: Female Impersonators in America*, Chicago & London: The University of Chicago Press.

Sedgwick, E. K. (1993). Queer Performativity: Henry James's *The Art of the Novel*. In *GLQ*, vol. 1, pp. 1-16.

Schechner, R. (2002) *Performance Studies; An Introduction*, New York: Routledge.

Wittig, M. (1992). *The Straight Mind and Other Essays*, New York; Beacon Press.

The Genealogy of Gender Performativity in J. Butler

Kazuki FUJITAKA

Gender performativity is the most famous and influential theory in Judith Butler. It questioned the sex/ gender distinction which some feminists took for granted at that time when *Gender Trouble* (1990) was published. This distinction regarded sex as the natural category on the one hand, gender as the cultural expression of sex on the other hand. It means naturalizing the dualistic representation of gender. On the contrary, Butler's performative theory suggested that sex is not a natural category, but is a fiction which is constructed by repeating gender performances. Through denaturalizing gender, her theory criticizes the representation of gender/ sexual minorities as "unnatural" and "abnormal," and seeks to theorize the way to make their survival possible.

This paper examines how gender performativity was theorized from the 1980s to *Gender Trouble*. Interestingly, her performative theory cannot be reduced to speech act theory, but it was also formed in relation to other theories; feminist/ queer theory and performance theory. Indeed, in her article "Performative Act and Gender Constitution" (1988) in which she referred to "performative" at first, Butler started from Simone de Beauvoir's text, *The Second Sex*, and then reread Beauvoir's idea of "gender as act" as "social performance" in performance theory. Moreover, she extended Beauvoir's argument of denaturalizing sex, referring to Gayle Rubin's study of kinship, Monique Wittig's theory of sex, and Esther Newton's analysis of Drag Queen. Thus, her performative theory is found not only in the context of speech act theory, but also in contexts of feminist/ queer theory and performance theory. From this genealogical perspective, this article seeks to rethink gender performativity.

Keywords:

gender performativity, Simone de Beauvoir, performance studies, sex, drag